

孫子に学ぶ

佐伯史談会長

高木嘉吉

年末に『孫子』を読んだ。先稿に引用した『唐詩選』と一冊に納っていたので、長いツンドクのお佗びに一読したが、荻生徂徠の講述に頼って大意を把握し得たと思っている。

『孫子』は書名で著者は孫武、戦国時代の齊の人である。孫武が兵法の大家であることは衆知のことであるが、私は孫武の名言を処世訓と受けとめて、皆さんと共に考えて見ようとするものである。

十三篇からなる『孫子』は、孫武が呉王闔閭こうりよに仕官を求めするために書いたものと伝えられている。これには異論もあるが、浅学非才の筆者は徹底的に追求することは出来ないで、一応孫武の著として筆を進める。

第一篇始計から用間に至る十三篇について簡単に内容を説明しよう。

始計しけいは、はかりごとを始めとすと読み、軍いくさをせんと思

はば、まづ敵と味方を計りくらべて、軍に勝つべきか勝つまじきかをよく目算して、勝つべき図をきわめて軍をすべきことを説いている。

作戦さくせん 作はおこすと読んで、作戦は士卒の勇気を奮いおこして、合戦を速にすべしと説き、長戦の弊を戒めている。

謀攻ぼうこう 謀攻とは謀を以て攻むることである。城を攻むるには、力を以て攻むるを下とし、謀を以て攻むるを上としている。

軍形ぐんぎょう 内にかくるる所を情と云い、外にあらはるる所を形と云う。形は勝負のきつかけにて、其の形の見えざるを形の至極とす、と説いているが玄妙でむずかしい。

兵勢へいせい 兵勢は兵の勢である。勢は自然現象の中に顕著で、かようにし、かくすれば必ずかよようになるという法則がある。兵の勢もこの理法にしたがえば、弱を転じて強

となし、少勢を以て多勢を挫くことが出来ると説いている。

虚実。唐の太宗が、朕もろもろの兵書を観るに、孫武に出づる無く、孫武十三篇 虚実に出づるなし、と言っているように孫子の真髓を示す篇である。

軍争。軍争とは勝利を争うことである。時刻を争い、神速に行動して勝利を収むべきことを述べている。

九変。此の篇は九つの変を説いて九変と名づけている。行軍。行軍は軍をやることと読んで陣押しのことである。

この篇は陣押しから、陣を取り、軍兵を置く場所、物見のこと等を述べている。

地形。六つの地形をあげ地形に応じて軍の法を定むべきことを述べている。

九地。九地とは九つの地である。前の地形篇には地の形に六つあることを言ったが、此の篇は地の勢に九つあることを説いている。

火攻。火を以て攻むることであるが、止むを得ざる時のみ用うべきものとして、その濫用を戒めている。

用間。間は間者、忍びの者のことである。諜者ともいう。

以上孫十三篇の梗概を述べた。心に残るものとして次の数句を挙げる。

○百戦百勝は善の善なる者に非る也 戦わずして人の兵を屈する者は、善の善なる者なり。

○上兵は謀を伐つ、其の次は交を伐つ、其の次は兵を伐つ、其の下は城を攻む。

○彼を知り己を知る者は、百戦殆うからず、彼を知らず己を知れば一勝一負、彼を知らず己を知らざれば、毎戦必ず敗る。

○善く戦う者は、人を致し、人に致されず。

次の一句は戦国の名将 武田信玄を思い出すので書き添える。

○其の疾きこと風の如く、其の徐やかなること林の如く、侵掠すると火の如く、動かざること山の如く、知り難きこと陰の如く、動くこと雷の震うが如し。

以上の中から私達は多くの処世訓を引き出すことができるであろう。孫子の兵法は、敵を知り己を知ることが基本であって、そこで計量して勝算あれば戦い、勝算がなければ決して戦わないものであった。生ぬるいようだがこれが処世の常道であろう。